

第2次世界大戦が終わって68年経ちました。私達、戦争を知らない世代は、親の世代に向かって、「何故、戦争を防げなかったのだ。何故、反対しなかったんだ。」と責めることがあったのではないのでしょうか。同じように、私たちは、次世代の者たちから責められるのではないのでしょうか。「何故、自分の世代で解決できないことが分かった原発を維持したのか。」と。私たちは、原発が制御できないものであることを知りました。使用済み燃料の処分ができないこと、人体に影響がほとんどないようになるまでに10万年とも100万年とも言われる遙かな時間が必要であることを知りました。それでも、まだ、原発を再稼働させるのですか。もう、原発を再稼働させるべきではありません。次の世代から責められないように、私たちの世代で、原発を止めるべきです。

ドイツは、フクシマの事故をみて、「安全なエネルギー供給のための倫理委員会」に原発の是非を問いました。科学技術ではなく、倫理の問題としたのです。そうです。原発を続けるか否かは、科学の問題ではありません。倫理の問題です。将来世代に対する責任として、10年以内に原子力発電から撤退を完了するとした結論をどう委員会は導きました。

戦争の悲惨さを知り尽くした世代が大勢いた時代は、現在の平和憲法の大きな価値を認め、戦争をしようなんていう勢力はごく少数でした。憲法を変えようと言う考えもごく少数でした。しかし、戦争から68年も経つと、軍隊を持たないと近隣諸国からなめられるとかいう考えをもつ勢力が増えてきました。原爆・水爆を持つために、あるいは、その能力があると思わせるために、原発や燃料の再処理は必要だということを言う人も増えてきました。先の参議院の通常選挙では、改憲も原発も大きな争点にはなりませんでしたが、ただ、民主党に対する落胆だけで投票先が決まったと言えます。この選挙の結果、安定多数を得た勢力は、原発を減らすのではなく進める政策が国民から支持されたと言い始めました。原発をどんどん再稼働させる方針のようです。普通の国になり、軍隊も持とうとしています。原発を輸出しようとしています。

いいのでしょうか。

フクシマを起こしてしまった我が国が、原発を維持し続けることは倫理的に正しくありません。世界に対する責任として、原発をなくす政策をとらなければならないはずで、それが倫理的ということのはずです。

中部電力も、運転中止を政府から求められた際に、津波対策さえできあがれば再稼働を認めるということを政府に約束させたということだけを頼りに、独自の計算に基づいて津波対策を続けています。中日新聞の8月23日の朝刊に、中部電力が、原子力規制委員会が定めようとしていた審査ガイドの参考値のM9.6は大きすぎるとして削除を求める意見をパブリックコメントとして寄せていたことが報道されていました。その中部電力の意見にもかかわらず、審査ガイドは、今年の7月から施行されています。中部電力が想定している地震の規模があきらかではありません。私たちは、中部電力に対し、どういう地震を想定して、原子炉等の耐震設計をしているのか、津波対策をしているのを明らかにするように求めています、はっきりとした回答はありません。M9.6の地震をも想定して対策をたてなければならないとしたら、もう、対策のたてようがないはずで、つまり、およそ、原発を再稼働させることは、倫理的でないというほかありません。

2013（平成25）年8月29日

弁護士 鈴木敏弘